

今月の重点活動

■いちご 本巣苺技術部会勉強会の開催

11月14日、本巣苺技術部会の勉強会が開催された。今回の勉強会では、いちご栽培で年々影響が大きくなっている気象変動について、その要因と解決策を話し合うことを目的とした。参加者は2グループに分かれ、まずは部会員が今作のいちごの頂花房分化、出蕾、開花や現在の生育状況、今後の出荷見込等について報告を行った。その後、近年の育苗上の課題やその解決策について討論を行った。

グループ討論では、前作と同様、今作も記録的な高温が花芽分化に悪影響を及ぼしており、さらに苗の生育不良、病害発生等も今作では多いことが報告された。栽培期間を通して高温対策が必要であるが、特に花芽分化に影響のある育苗期から定植期の高温対策を今後、導入していく必要性が確認された。

農林事務所から、本巣苺技術部会で実証した現地試験の現在までの結果について報告を行った。今回、多くの部会員が実証試験に取り組んだことで、安定生産につながる結果や知見を多く得られたことを説明し、今後も部会員全員での取り組みが重要であることを強調した。

農林事務所では生産者、関係機関と連携し、気象変動下でのいちご安定生産を目指した取り組みを継続していく。



【グループ討論の様子】

(園芸産地支援第二係)

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■えだまめ JAぎふえだまめ部会「ぎふ清流GAP」取り組みへの支援

JAぎふえだまめ部会は、平成30年に「岐阜県GAP確認制度」による評価を受け、15戸の生産者により先行して取り組みを始めた。えだまめを共選品として販売する部会が販売戦略上GAPのメリットを享受するには、部会員全員による取り組みが必要であるが、構成員に兼業農家や高齢農家を多く含むため、「岐阜県GAP確認制度」廃止後に設けられた「ぎふ清流GAP評価制度」においても、新たにに取り組む機運は見られなかった。



【改善された燃料保管の様子】

その後、令和5年以降、農薬の適正な使用や管理、生産物の衛生管理など、すべての農家に取り組める管理項目に絞り、部会全体で内部点検等の取り組みを行ってきた。この過程で一部の生産者からは「適切に農場管理が行えているか確認したい」、「必要な改善を行うために外部の評価を受けてみたい」などの意見が出るようになった。それを受け今年度、3戸の生産者を先行実施者として「ぎふ清流GAP」に取り組み、評価受検することとした。

農林事務所は8月9日に生産者向け勉強会を開催し、その後JA担当者と連携して生産者への個別指導を行い、9月24日～10月24日に農場評価及び組織評価を受検した。いくつかの指摘事項があったものの、まずまずの評価であり、受検者は手ごたえを感じていた。

農林事務所では、今後も各生産者の営農改善につながる取り組みを支援し、意識の高い生産者を育成・支援していく。

(園芸産地支援第一係)

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■ブロッコリー 出荷規格統一目揃え会を開催

秋冬ブロッコリーの出荷を前にして、JAぎふ秋冬ブロッコリー出荷連絡協議会は、11月12日、JAぎふ合渡支店で生産者・関係者40名出席のもと統一規格目揃え会を開催した。

同出荷連絡協議会では、「おはよう」を主力品種とし、「こんにちは」等の優良品種を約8haのほ場で栽培し、高品質な秋冬ブロッコリー生産に取り組んでいる。

当日は、市場担当者から青果物市況についての報告があり、全農岐阜県本部担当者からは販売対策に関する話がなされた。その後、農林事務所から今後の栽培管理と病害虫対策について指導を行った。

目揃え会では、生産者が持ってきたブロッコリーをサンプルにして、意見を出し合いながら、規格や出荷時の注意点等について情報共有を行い、品質管理や出荷規格などを確認した。出荷連絡協議会長は「秋冬ブロッコリーの産地として、しっかりと規格を揃え、市場から高評価を得るためにも厳しく出荷を行ってほしい」と話した。

秋冬ブロッコリーは県内市場を中心に来年3月頃まで出荷される見込みであり、農林事務所は今後も「計画出荷・品質管理」に向け生産者、関係者と一丸となって取り組む。

【目揃え会の様子】



(地域支援第一係)

■ハツシモ岐阜 SL 種子の安定生産（羽島市） 収穫・発芽試験が終了

岐阜農林事務所管内では、羽島市の採種ほ7haで「ハツシモ岐阜 SL 種子」の生産が行われている。ハツシモ岐阜 SL 採種ほの収穫は、10/17～11/1に行われ、粗粍重量は44.5tであった。登熟期の異常高温によりやや充実不足で、2.3mm篩による歩留りは昨年よりやや悪くなったが、粗粍の単収は昨年とほぼ同等の654kg/10aを確保することができた。

農林事務所では、10/22～11/28にフレコンごとに採取したサンプルにより生産物審査を行い、種子の発芽率を確認した。その結果、すべてのサンプルで発芽率が90%以上であることを確認できたため、44.5tの種子の全量を合格とした。生産物審査を合格した種子は、このあと美濃種子センターへ運ばれ、精選・袋詰めされて来年度のハツシモ岐阜 SL 種子として県内各地の生産者に届けられる予定である。

農林事務所では、水稻の安定生産を支える優良種子の確保のために、栽培支援活動を継続して実施していく。

【生産物審査の様子】



(地域支援第二係)

■にんじん 各務原にんじん出荷説明会

各務原市園芸振興会にんじん部会は、11月9日に冬にんじんの出荷説明会を開催した。出荷説明会は、JAぎふ各務原にんじん選果場の選果開始日に開催され、JA担当者からの出荷基準の確認、全農や市場関係者からはにんじんの市況や他産地の出荷情報が提供された。農林事務所からは、栽培管理情報の提供を行った。

今作の冬にんじんは、8月から9月の高温や台風10号の影響により発芽の不揃いや播種作業の遅れにより厳しいスタートであったが、9月の秋雨の降水量が少なかったことなどにより病害の被害は少なく、順調な生育をしている。今年は秋の高温の影響で11月中の市場出荷は高単価が期待できるため、生産者の生産意欲は高い。

これからも夏の高温・豪雨被害の発生が懸念されるため、農林事務所は、引き続き高温対策や作型についての技術実証を行い、産地支援を実施していく。

(地域支援第二係)



【にんじん出荷説明会の様子】

■水稻 根尾米研究会が総会を開催

根尾米研究会（平成21年設立）は、11月8日、総会を開催した。研究会は根尾地域において特別栽培米の基準で栽培したコシヒカリを「根尾米」としてJAぎふに販売されている。令和6年産は収穫直前に大雨で倒伏があったものの、目標の1,000俵を超える出荷があった。

総会では、事業実績及び事業計画等が提案され、すべてが承認された。会長からは「米の価格が上がったが、値段に合うような美味しい根尾米を作っていきたい」との挨拶があり、作付け前に栽培研修会の計画も承認された。また、栽培意欲向上に向けて研究会の帽子も作られ、会員に配付された。研究会員も令和6年度は3名が加入、7年度には1名が加入し、更なる生産量の向上が見込まれる。

農林事務所からは、6年産の生育経過や調査圃場の結果と、7年産の栽培に向け近年の温暖化により根尾地域でも高温障害が見られるようになったことから、その対策等について説明を行った。今後関係機関と連携し、栽培管理指導など生産振興を支援していく。

(地域支援第三係)



【青空教室の様子と帽子】